

2026/8/6

中経論壇

経営支援助NPOクラブ
報報チーム

井上 真己子



人物である。カーキ色のジャンプスーツに黒いヘルメット姿で、火炎瓶を掲げて現れた瞬間、ガマの反対側にいた読

2019年4月、私は取り壊しの決まった古いアパートの一室で、目の前にいる老人の弱々しさに面喰らった。天

皇の200年ぶりの生前退位を前に、所属する米紙東京支局でも特集取材を進めていた。那覇での取材最終日、よ

うやく連絡がついて会うことができた知念功氏は、一貫した話をするのもやっとだった。彼は、1975年夏、ひ

めゆりの塔の前にあるガマの底に6日間潜み、当時41歳の皇太子（現上皇陛下）の到着

を狙って火炎瓶を投げつけた

このテロは、壮絶な地上戦を経験した沖縄の、皇室に対

人物である。カーキ色のジャンプスーツに黒いヘルメット姿で、火炎瓶を掲げて現れた瞬間、ガマの反対側にいた読

売新聞の記者・山城博明氏が夢中でシャッターを切った。写真には、真剣に説明を聞く皇太子夫妻と、誰にも気づか

れず不気味に立つ犯人の後ろ姿が生々しく写っている。取材時に、知念氏は雑然とした部屋

の床に座り、缶コーヒを振る舞いながら、「皇太子を傷つけるつもりはなく、ただ驚かせて天皇に謝ってもら

いたかった」と当時を振り返った。

このテロは、壮絶な地上戦を経験した沖縄の、皇室に対

国民の総意に基づく皇室とは

する複雑な感情の表れでもあった。しかし皇太子夫妻は怯まらず予定を続行し、以来40年以上にわたって国内外の戦跡や被災地を訪れた。犠牲者に寄り添い、膝を折って対話する「平成流」の歩みは、上

皇陛下が「象徴天皇」の在り方を模索した日々であったと後に語られたが、それが国民の信頼を築き、現在の高い支持の礎となった。

さて、改正皇室典範がわずか数時間の「審議」で成立した。多くの有識者や新聞各紙の社説が、歴史

的事実や将来の持続可能性などの観点から懸念を示したにも

かかわらず、採決は拙速になされた。多くの国民が持つ疑問に対する合理的な答えもなかった。根拠とされた「2600年の皇統」は明治期に作られた神話にすぎず、議論の過程では、政治家の「男尊女卑」と批判された発言もあつた。

今回の改正は、将来、遠く36〜38親等も離れた旧宮家からの養子を可能とするが、これは戦後の歴代天皇が国民と共に築いた象徴天皇の姿からあまりに乖離（かいり）している。現天皇陛下は、6月「国民の皆さんの理解が得られるものになることを望んでおります」と異例の懸念を表明された。政治主導の議論が、陛下の切に願われた「国民の理解」を置き去りにしている現状は、憲法が定める「国民の総意」を軽んじているのではないか。多くの国民が敬愛する天皇が今後もそうであることを願い、私は今回の改正の再考を強く求めるものである。

皇室典範改正の再考求める